



TITLE:

箱庭制作過程に関する基礎的研究：
「一つのミニチュアを選び,置く」
という箱庭制作の数量的データの
検討

AUTHOR(S):

石原, 宏

CITATION:

石原, 宏. 箱庭制作過程に関する基礎的研究: 「一つのミニチュアを選び,置く」という箱庭制作の数量的データの検討. 京都大学大学院教育学研究科紀要 2003, 49: 455-467

ISSUE DATE:

2003-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/57472>

RIGHT:

箱庭制作過程に関する基礎的研究

—「一つのミニチュアを選び、置く」という箱庭制作の数量的データの検討—

石 原 宏

A basic Study of Sandplay-Making-Process
An Investigation of the Process of Choosing and Placing a Miniature Toy

ISHIHARA Hiroshi

問 題 と 目 的

箱庭療法に関する研究の今日的な課題の一つは、「箱庭の制作過程において何が起きているのか」ということについて、臨床実践に結びつくような実証研究によって明らかにすることである（平松 2001など）。制作過程については、岡田（1984）が、「制作中の心の動きは大切であり、これこそが箱庭療法の核心でもあるから、制作過程の研究は今後の大きな課題である」と述べているように、長年「今後の課題」としてあげられ、探索的に研究が進められてきているが、困難な課題が多いことも事実である。というのも、制作過程においては、極めて複雑な事象が生起し、そこにはさまざまな要因が関与していると考えられるからである。

制作過程に生起する事象としては、まず制作者が作り出し刻々と変化する箱庭作品の動きがあり、そうした作品の動きを生み出し、またその動きに伴う制作者の心の動きがある。作品の動きを「構成の過程」、制作者の心の動きを「体験の過程」と呼ぶこともできるだろう。また制作の場には、制作を見守るセラピスト役にあたる立会人が存在する。立会人は制作に携わるわけではないので「構成の過程」は存在しないと言えるが、制作者の動きや箱庭作品の移り変わりに伴って心は活発に動いており、立会人の「体験の過程」というのはとても重要となってくる。そしてもちろん、そこには制作者と立会人の「関係性」ということが大きく関与している。さらに、当然のことではあるが、ミニチュア玩具や砂箱、砂といった箱庭用具の要因が、制作過程に与える影響というのも考慮に入れなければならない。

これら制作過程に生起する事象や要因を、「臨床実践に結びつくように」という意図のもとで、全て扱おうとして真っ向から取り組もうとすると、あまりの複雑さに圧倒され、実証研究として成り立たせるのが非常に困難であることを痛感させられる。そこで、視点を定め、要因を絞ることが必要となってくる。

本論で筆者が行なった研究は、一般的な箱庭療法のセッティングのなかで、ミニチュアを一つだけ選び、置くことによって箱庭を制作するという方法からなっている。つまり、箱庭制作に使

用できるミニチュアの要因を限定することによって、その他の事象、とりわけ「制作者の体験の過程」を際立たせようとするのである。

一つのミニチュアを選び、置くという方法による箱庭制作の研究は今のところ存在しない。しかし、箱庭療法の臨床において実際に一つのミニチュアのみを用いて表現されることがあるのは事実である。例えば、リース（2002）は、人形を一つだけ使って力強い表現をした男性クライエントの箱庭制作の様子を取り上げている。その表現は「たった一つのモノ」を用いた極めてシンプルなものであるが、「彼の雰囲気、気合いなどから推して、ここに顕わされたものが、彼にとって相当重大な意味をもっているような感じが伝わってくる」というように、一つのミニチュアのみによっても意味のある表現が行なわれうることを示している。

また、三木や光元は、一つのミニチュアを選んで置いてもらうということが、箱庭療法の本質的な体験について説明するときに効果的な役割を果たすことを、エピソードとともにあげており（三木ら 1991および、光元ら 2001）、一つのミニチュアを選び、置くというシンプルな手続きによっても、箱庭の本質に触れるような体験が起りうることを示唆している。

箱庭療法以外の分野で見れば、シンプルな手続きをとることで複雑な体験に関する研究を可能にしているような例がいくつかあげられる。例えば、水島（1978, 1979, 1986など）の「図式的投影法」は、カードや駒を用いて簡略化された図式に複雑な体験世界が投影されることを明らかにしているし、藤原（1994, 2001）の「三角形イメージ体験法」では、「何の変哲もない三角形」をイメージし、操作することによって、神経症症状を形成する不安のような複雑な感情体験を現象させることが可能であることを詳細な臨床事例の検討をもとに例証している。これらの研究は、手続きを簡素にしたからといって、それにともなう体験自体が失われてしまうわけではないことを示していると考えられる。

以上のような諸事実から考えて、「一つのミニチュアを選び、置く」という方法をとることによって、手続きはシンプルになるものの、意味のある制作体験が必ずしも失われるわけではなく、またむしろ箱庭制作の本質に触れるような体験さえ起りうることを示されており、「制作過程」における制作者の「体験の過程」に関する研究方法として誤ったものではないと言えるだろう。

また、制作者の体験に限らず、ミニチュアという要因が限定されることによって、砂箱や砂という要素が際立つことも考えられ、こうした要素が箱庭制作に与えている影響について検討することも可能となるかもしれない。さらには、制作者と立会人の関係性の変化が箱庭制作にどのような形で影響を与えるのかということに関しても、ミニチュアが一つである分だけ検討しやすくなるのではないだろうか。

本論では、これらの興味深い種々のテーマについて検討する前段階として、まず「一つのミニチュアを選び、置く」という箱庭制作がどのような特徴をもつものなのかという点に関して、数量化できるデータを整理することを通して検討していくことを目的とする。

方 法

1. 調査対象（被験者）：大学（院）生、20名（男性10名、女性10名）を対象に調査を行った（年齢の範囲：男性18～26歳、女性18～28歳）。

2. 調査者：箱庭制作への立会い，および制作後のインタビューは全て筆者が行った。
3. 実施場所：調査は，心理教育相談室の面接室として使用されている一室にて行った。
4. 実施期間：平成12年10月～11月

5. 箱庭用具：砂箱およびミニチュア玩具は，面接室に備えられているものを用いた。砂箱は，箱庭療法用として普及しているもので，内側が水色に塗られた57×72×7cmの木箱に，約2cmの深さで，粒の細かい乾いた砂が入っていた。ミニチュア玩具は，人物類，動物類，植物類，建造物類，乗り物類，石，貝殻，柵など，あわせて550個ほどあり，高さ180cm，幅180cm，奥行30cmの左右各5段に分かれた棚に，おおよそ種類ごとに分けて並べられていた。なお，砂箱は，ミニチュア玩具の並んだ棚の正面，70cmほど離れた位置に，床から約80cmの高さで設置した。

5. 手続き：調査は，個別の面接法で，各被験者につき2回行われた。

< 1回目 >

(1) 箱庭制作：「この棚に並んでいるミニチュアの中から，『これだ』と思うものを一つだけ選んで，砂箱の中の『ここだ』と思う位置に置いてみて下さい。その際，箱の中の砂は自由に使用して下さい結構です。なお，制作に要した時間を測定させていただきますが，制限時間はありませんので納得のいくまでやって下されば結構です。」と教示し，箱庭制作を実施した。このとき調査者は，ミニチュアの並んだ棚，砂箱，制作者の全てが見える位置に立って制作を見守った。制作所要時間は，ストップウォッチで計測した。また，被験者の了承を得て，制作の様子を，面接室の片隅に三脚で固定した8mmビデオで記録した。

(2) 質問紙記入：制作終了後，被験者に，制作体験（ミニチュアを選ぶ，砂箱に置く，砂に触るの3場面）を振り返るための質問紙を手渡し，記入するよう求めた。被験者が質問紙に回答している間，調査者は，「所要時間」，「選ばれたミニチュア」，「置かれた場所」，「砂への関与の有無」，「制作の様子」について記録した。

(3) インタビュー：質問紙への回答について，さらに詳しく尋ねるためのインタビューを行った。インタビューでのやりとりは，被験者の了承を得て，テープレコーダーで記録した。

以上が1回目の手続きである。なお，被験者退室後，作品を写真に撮って記録した。

< 2回目 >

2回目は，箱庭制作にとりかかる前に，前回の体験について記憶に残っていることを簡単に記述してもらう手続きを設けたこと，質問紙において「前回の体験の影響について」という項目を加えたこと以外は，< 1回目 >と同様の手続きによって調査を行なった。また，2回目も，1回目と同様，各種記録をとった。

結 果 と 考 察

被験者ごとの「所要時間」，「使われたミニチュア」，「ミニチュアの置かれた領域」，「砂への関与の有無」に関する結果を表1に示した。これらの結果をもとに，1つのミニチュアを選び，置くという箱庭制作における被験者の全体的な特徴について整理し，考察していくことにする。

表1 被験者ごとの所要時間、ミニチュア、領域、砂への関与に関する結果

被験者		1回目				2回目			
No.	age	所要時間(分)	ミニチュア	領域	砂	所要時間	ミニチュア	領域	砂
M1	20	2.40	ピアノ	右中	有	1.30	キリン	右奥	無
M2	18	2.68	赤ん坊	中央手前*	有	5.60	ワシ	中央手前*	有
M3	19	4.20	裸の赤ちゃん	右奥	有	2.27	戦車	中央	有
M4	18	1.90	ミニカー	右手前	有	2.95	ピアノと人形	中央*	無
M5	23	5.32	木(大きな目の)	右奥	有	4.07	ゴジラ	左奥	有
M6	23	7.93	花を持った女の人	右奥	有	7.65	いす	中央奥	無
M7	20	2.95	グランドピアノ	中央*	有	5.18	城	中央*	有
M8	19	27.93	ジャミラ	中央	有	13.90	グランドピアノ	左手前*	有
M9	26	2.30	ウルトラの父	中央*	有	1.72	赤い橋	中央*	有
M10	20	25.58	かおと耳の黒い羊	中央	有	20.15	アルマジロ	右手前	有
F1	28	14.87	青いベンチ	中央	有	17.30	ラクダ	右手前	有
F2	19	3.75	小さなバンダ	右手前*	有	9.50	病院のベッド	中央*	有
F3	19	4.18	木(花のついた)	中央*	有	3.23	橋	中央	有
F4	20	2.68	昔風の家	左奥	無	6.25	戦士	左手前	有
F5	18	1.55	グランドピアノ	中央	無	4.78	白いベンチ	右奥	無
F6	18	4.42	うみがめ	中央	有	3.87	いし	中央	無
F7	19	1.67	カンガルー	左手前	有	1.85	イルカ	左中	有
F8	18	24.48	小さな針葉樹	右手前	有	22.62	小さい家	右中	有
F9	20	3.13	グランドピアノ	中央*	有	4.95	ペンギン	左手前	有
F10	18	2.63	家(赤レンガの)	中央*	有	1.58	グランドピアノ	中央	有

注1) 「被験者No.」の「M」は男性を、「F」は女性をあらわす。

注2) 「所要時間」とは、調査者が開始の合図をしたところから被験者が終了の意志を示したところまでの時間を指す。

注3) 「ミニチュア」名は、被験者の命名による。

注4) 「領域」は、制作した位置から砂箱に向かった場所。また、「*」印は、砂箱を縦に使用したものをあらわす。

注5) 「砂」は、触る、掘る、動かす、盛り上げるなど、「砂への関与」の有無をあらわす。

1. 制作時間に関する結果と考察

(1) 性別による所要時間の差

1, 2回目を総合した男女別の所要時間の平均値(SD)を表2に示した。男性が7.40分(7.84), 女性が6.96分(6.89)となった。SDが非常に大きく偏りのある分布になっており, t検定による検定は妥当でないと考えられたため, ウィルコクソンの順位和検定によって男女差の検定を行ったところ, 男女間に有意な差は見られなかった($z=0.095$ n.s.)。したがって, 以下, 所要時間に関しては男女間に差はないものと考えた。

表2 男女別所要時間の平均値(SD)

	平均値(SD)
男性	7.40分(7.84)
女性	6.96分(6.89)

(2) 回数による所要時間の差

男女を総合した回数別の所要時間の平均値 (SD) は、表3に示したように、1回目が7.33分 (8.37)、2回目が7.04分 (6.65) であった。これも分布に偏りがあると考えられたため、ウィルコクソンの符号付順位和検定によって差の検定を行ったところ、回数間にも有意な差は見られなかった ($z=0.24$ n.s.)。したがって、所要時間に関しては、回数間にも差はなかったものと考えられる。

表3 回数別所要時間の平均値 (SD)

	平均値 (SD)
1 回目	7.33 分(8.37)
2 回目	7.04 分(6.24)

(3) 所要時間の平均値と度数分布

男女、回数ともに総合した全体としての所要時間の平均値 (SD) は、7.18分 (7.38) であった。データのばらつきが大きいことを考慮に入れ、所要時間の度数分布を表4に示した。1回目、2回目ともに、被験者の半数以上 (1回目:14人、2回目:11人) が5分以内で制作を終えており、0分から9.99分までに全被験者の80% (各回16人) が収まっていることが分かる。その

表4 所要時間の度数分布

制作時間 (分 ~ 分)	度数 (人)		
	1 回目	2 回目	Total
0.00 ~ 4.49	14	11	25
5.00 ~ 9.99	2	5	7
10.00 ~ 14.49	1	1	2
15.00 ~ 19.99	0	1	1
20.00 ~ 24.49	1	2	3
25.00 ~ 29.99	2	0	2
Total	20	20	40

一方で、所要時間10分を超えた被験者が各回4人ずつおり、そのうち1回目で3人、2回目で2人が20分以上を要している。これらの被験者が全体の平均値を大幅に引き上げているものと考えられることから、今後被験者数を増やしていった場合、所要時間の平均値はもう少し小さい値をとることが予想される。参考までに、各回における所要時間の最小値、各四分位数、および最大値を示すと表5のようになる。

表5 各回における所要時間の最小値、各四分位数、および最大値 (分)

	最小値	第1四分位	中央値	第3四分位	最大値	四分位偏差
1 回目	1.55	2.52	3.44	6.63	27.93	2.06
2 回目	1.30	2.61	4.87	8.58	22.62	2.98
1,2 回 Total	1.30	2.52	4.13	7.79	27.93	2.64

所要時間に関して興味深いのは、1回目で10分を超えて制作した4人と2回目で10分を超えて制作した4人が、全て同一の被験者、すなわちM8 (1回目:27.93分、2回目:13.9分)、M10 (25.58分、20.15分)、F1 (14.87分、17.3分)、F8 (24.48分、22.62分) であるということである (表1参照)。これら4人の被験者の所要時間は、各回で見ても、1、2回目総合で見ても、「第3四分位数+1.5四分位偏差」の範囲に収まりきらない数値であり、他の16人の分布からは大幅に外れていることを示している。このことは、これら4人の被験者が、所要時間という観点から見たときに、非常に特徴的な結果を示したということであり、以下の結果の検討においても注意を要するであろう。

(4) 1回目と2回目の所要時間の相関

1回目と2回目の所要時間に関してピアソンの積率相関係数を求めたところ、 $R=0.89$ （無相関検定の $t=8.34$ $p<.01$ ）となり、非常に高い正の相関があることが示された。つまり、1回目の制作を短時間で終えた者は、2回目でも短時間で制作を終了し、1回目の制作に長時間を要した者は、2回目でも長時間かけて制作を行なったということである。このことは、2回の制作において、被験者ごとに所要時間の長短がある程度安定した傾向を持つことを示しており、被験者の持つ何らかの人格特性を反映する指標となり得ることを示唆していると考えられる。例えば、木村（1984）は、「箱庭制作のための所要時間の長短は、箱庭作りにコミットする度合と、周囲に対する防衛的態度、興味の多少によって左右されることが考えられる」と述べているが、「一つのミニチュアを選び、置く」という今回のような箱庭制作においても同様に、箱庭制作に取り組む態度のようなものが反映されているのかもしれない。

(5) 所要時間についての先行研究との比較

岡田（1984）および木村（1985）の調査によると、ミニチュア数に制限のない一般的な箱庭制作における大学生の所要時間の平均は20分前後（岡田：21.24分、木村：19.6分）であり、使用されるミニチュア数の平均は40個強（岡田：45.0個、木村：43.6個）である。この値と比べると、「一つのミニチュアを選び、置く」という今回の箱庭制作における所要時間の平均は明らかに短い。例えば、全体を通して所要時間が最短であったM1の2回目（1.33分）の制作過程を記すと、「開始後すぐにミニチュア棚に向かい、動物類のミニチュアが置いてある棚をしばらく見たあと＜キリン＞を手に取り（ここまで0.72分）、砂箱に向かう。＜キリン＞を手に持ったまましばし砂箱を見渡し、右奥隅に＜キリン＞を置く（ここまで1.17分）。一旦＜キリン＞から手を離しかけるが、すぐ持ち直してやや右側に移動させ（ここまで1.27分）、もう一度砂箱を見渡してから、『これで』と終了の合図（ここまで1.33分）」となる。このように、ほとんど迷いなくミニチュアを選び、砂には手を加えずに、ほとんど迷いなく置くならば、1分程度で完了できるわけであるから、所要時間の平均が一般的な箱庭制作よりも短くなるのは当然の結果と言えるだろう。岡田（1984）の調査における大学生の所要時間の最短が5.00分であり、今回の調査では被験者の半数以上が、この最短時間以下で制作を終えているわけである（表4参照）。

ところで、岡田（1984）や木村（1985）の結果からミニチュア1個当たりの所要時間を単純に計算すると約0.5分／個となる。この値と比べると、今回の調査における所要時間は、全ての被験者で長くなっており、「一つのミニチュアを選び、置く」という行為が、単に一般的な箱庭制作でいくつか置くミニチュアの中の一つとして「一つのミニチュアを選び、置く」という行為とは異なる性質を持つことを示唆している。また、ミニチュアが一つであっても、先に述べた4人の被験者（M8, M10, F1, F8）のように20分前後の時間をかけて制作した者もあり、ミニチュア数の変化の割合に応じて所要時間が変化するというほどミニチュア数と所要時間の関係は単純ではないようである。

「『これだ』と思うものを一つだけ選んで、砂箱の中の『ここだ』と思う位置に置いてみて下さい。」という同じ指示のもとで、1分程度で制作を終えた者（1回目のM4, F5, F7, 2回目の

M1, M9, F7, F10) と、20分前後の時間をかけて制作する者(1, 2回ともM8, M10, F1, F8)とがいたのは、被験者によって教示の受け取られ方が少しずつ異なったからである、と考えられるかもしれない。一つのミニチュアを選び置くことで制作を終えるとき、その一つミニチュアは、「最初の一つ」であると同時に「最後の一つ」でもあるという性質を有している。今回の調査の教示では、一般的な箱庭制作において「最初の一つ」のミニチュアを置くようなつもりで制作に取り組むことも、「最後の一つ」のミニチュアを置くようなつもりで制作に取り組むことも可能であったと考えられる。「最初の一つ」を置くようなつもりで制作するときには、あくまで、はじまりの一つとして、続けてミニチュアを置いていける可能性を残すような置き方になることが予想されるし、また「最後の一つ」を置くようなつもりで制作するときには、その一つによって箱庭を作品として完成させようとするような置き方になることが予想される。

もちろん全ての被験者にとって一つのミニチュアは、「最初の一つ」であると同時に「最後の一つ」なのであるが、敢えて分けて考えてみると、例えば、先ほどあげたM1の2回目のような選び方・置き方は、「最初の一つ」のミニチュアとしての役割がより強く反映された例であると考えられる。このように考えると、所要時間が1分程度というように、一般的な箱庭制作で単純に算出したミニチュア1個あたりの所要時間0.5分に近い値となることも説明できるのではないだろうか。逆に、所要時間20分前後の4人(M8, M10, F1, F8)では、「最後の一つ」のミニチュアとしての役割がより強く反映された選び方・置き方となっており、箱庭を一つの作品として完成させようとする意図がより強く感じられる例であると考えられる。これら4人の被験者は、1回目、2回目ともに、単にミニチュアを一つ選んで置くだけでなく、砂を入念に触って丁寧に造形し、砂の造形を生かした形でミニチュアを置いており、使えるミニチュアは一つであっても、箱庭を一つの作品として完成させようとしたことがうかがえるのである。そのために、所要時間も20分前後と、ミニチュア数に制限のない箱庭制作における平均値に近づいたのだと考えられるのではないだろうか。

(6) 初発時間に関して

初発時間(調査者が開始の合図をしてから、被験者が初めて砂箱の中で制作を始める、すなわち砂に触るか、アイテムを置くまでの時間)の回数別の平均値(SD)を表6に示した。1, 2回とも3分強から4分弱という値になっている。

表6 回数別初発時間の平均値(SD)

	平均値(SD)
1回目	3.87分(4.27)
2回目	3.42分(2.20)

平松(2001)によると、大学生・大学院生15名を被験者に行った(ミニチュア数に制限のない)箱庭制作調査での平均初発時間は、ほぼ1分前後であり、この値は12回連続して箱庭制作を行っても変化はなかったという。平松の結果と比較して考えると、今回の調査のようにミニチュア一つに限定することによって初発時間はかなり長くなるということが言えそうである。

先にも述べたとおり、今回の制作で選ばれ、置かれる一つのミニチュアが、「最初の一つであると同時に最後の一つでもある」という性質を持つことを考えると、初発時間が一般的な箱庭制作よりも長くなったというこの結果は、選ぶべきミニチュアが「最後の一つ」であるということが、ミニチュアを選ぶ過程で多くの被験者に影響を与えていたことを示しているように思われる。

というのも、ミニチュア棚に向かっている、使いたくなるようなミニチュアを見つけたとしても、一つしか選ぶことができないためにすぐには砂箱に置いてしまわず、一つ置くのに、より相応しいミニチュアが他にはないかどうかさらに探索してみる、というような過程があったことが想像されるからである。

なお、砂を触るところから制作をはじめた被験者とミニチュアを置くところから制作をはじめた被験者の比は、1回目で砂：ミニチュア＝11：9（うち2人は砂に触らず）、2回目で砂：ミニチュア＝10：10（うち5人は砂に触らず）であり、おおよそ半数ずつであった。しかし、砂から触りはじめた者のうち、ミニチュアを決める前に砂を触った被験者は、1回目で3人（M3, M7, F8）、2回目で2人（F1, F8）のみであった。残りのそれぞれ8人ずつは、ミニチュアを手を持って砂箱に向かったうえで、砂を触るところから制作をはじめたのである。つまり、実際にミニチュアを置いたか、砂を触ったかの違いはあるが、初発反応の際にすでにミニチュアを手を持っていたものが1回目で17人、2回目で18人いたということであり、ほとんどの被験者が「ミニチュアを選ぶ→砂箱に向かう→ミニチュアを置くor砂を触る」という順序によって制作したことを示している。このことから、ミニチュアを一つに決めるまでの時間が長くなったことが、初発時間が長くなった要因であると考えられるのである。

2. 使われたミニチュアに関する結果と考察

(1) 1回目と2回目のミニチュア

使われたミニチュアについて見てみると（表1参照）、全ての被験者が1回目と2回目で用いるミニチュアを変えていることが分かる。2回目には1回目と違うものを選ぶように、このような思いは、「今回は違うものを選んでみたいと思った（F4）」、あるいは「前回置こうと思ったものを、今回置こうとは思わなかった（M7）」など20人中12人の質問紙への回答において言及されている。そのうち8人（M2, M4, M7, M8, M9, F6, F7, F10）は、漠然と「前回とは違うもの」を選ぶようにし、3人（M1, M3, F4）は明確に「前回と対照的なもの」（例えば、無生物に対して生物など）を、1人（M5）は、「前回気になっていたが置けなかったもの」を選ぶという気持ちが起こったと回答している。

いずれの場合も、2回目には選ばれ、置かれたミニチュアが、1回目の体験を踏まえた上での結果であることを示しており、2回目に置かれたものだけを見ていたのでは、その理解を誤る可能性が高いことを示していると考えられる。箱庭療法において作品をシリーズとして系列的に見ることが必要とされるのは、このように制作者が以前の制作を踏まえた上で、次の箱庭を制作しているためとも考えられよう。

また、1回目と2回目で異なるミニチュアが選ばれたということは、「何が置かれたか」ということのみから箱庭作品とその制作者について議論することには慎重になるべきことを示唆しているように思われる。このことは、全く同じ「(グランド) ピアノ」のミニチュアが、1, 2回を総合すると7人もの被験者に選ばれたことから指摘することができ、「何が置かれたか」だけでなく、「いかに置かれたか」という側面が箱庭理解に欠かせないものであることを改めて感じさせる結果と言えるだろう。

ところで、約550個もあるミニチュアの中から、全く同じ「(グランド) ピアノ」が7人もの被

験者に選ばれたというのは、非常に興味深い結果である。他のミニチュアは、どれ一つとして同じ物が使われなかったことを考えると、ますます興味深いのであるが、なぜこのような結果となったのか、はっきりとは分からない。これらの被験者がピアノを選ぶに至った要因として言及したものを列挙すると、「真っ黒で目についた」(M1)、「ピアノが一つだけ黒く光って見えた」(F5)、「一個だけ黒いし」(F9) など色に関するもの、「複雑な形にひかれた」(M1) など形状に関するもの、「一つ置くなら見栄えがする」(F10) など大きさに関するもの、「ちゃんとグランドピアノっぽく（天板が）開くし」(M8) など再現性の良さに関するものといったように、ミニチュアの持つ外的特徴が多くあげられていた。一方でまた、「11年間ピアノを習っていたが、最近弾いていない」こと (F5)、「グランドピアノ以外はピアノでないと思っているが、大学に入ってからグランドピアノで弾いていない」こと (M7)、「弟がピアノをずっと習っていて、最近その弟から連絡があった」こと (M4)、「最近、体調が思わしくないという連絡をうけた祖父の家にあったピアノを思い出した」こと (F9)、また「グランドピアノに対する憧れをずっと持っていた」こと (M8, F10) など、ピアノにまつわる個人的な体験について語る被験者も多かった。このように、グランドピアノのミニチュアの外的な特徴が被験者の興味をひくものであったことと、グランドピアノが、被験者の過去の思い出などを含めた個人的な体験を特に刺激しやすいものであったことが重なったために多くの被験者によって選ばれたのであろう、と今のところ考えている。

ピアノに限らず、一つのミニチュアを選ぶというときに、その選ばれたミニチュアは、箱庭を制作している「今・ここ」での体験のみならず、制作者の生きてきた過去の個人的体験も反映したものとなっているのであろう。選ばれたミニチュアの意味内容について議論するには、そうした被験者の個人的体験も考慮に入れることが不可欠なと思われる。

(2) 使われたミニチュアの種類

使われたミニチュアを種類ごとに分類して集計したものを表7に示す。

表7 使われたミニチュアの種類

	人間類	動物類	植物類	建造物類	乗り物類
1 回目	4 個 (20.0%)	5 (25.0)	3 (15.0)	7 (35.0)	1 (5.0)
2 回目	1 個 (5.0%)	7 (35.0)	0 (0.0)	11 (55.0)	1 (5.0)
1、2 回 Total	5 個 (12.5%)	12 (30.0)	3 (7.5)	18 (45.0)	2 (5.0)

注 1) 「ウルトラの父」などの「擬似人間」は「人間類」に、「ゴジラ」などの「怪獣」は「動物類」に含めた。また「建造物類」は、「建築物」と「家具」を含むカテゴリである。

注 2) 被験者 M4 は、2 回目に「ピアノ」と「人形」の 2 つのミニチュアを置いたが、先に置いた「ピアノ」のみをカウントした。

1 回目は、乗り物が 1 個と少ないほかは人間、動物、植物、建造物がほぼ同程度の割合で選ばれている。2 回目は、乗り物と人間が 1 個ずつ、植物は全く使われておらず、動物と建造物が多く選ばれている。

1, 2 回を通じて乗り物が少ないが、一般的な箱庭制作においても、乗り物は高校生以上ではあまり使われなくなると言われており (岡田 1984, 木村 1985)、一つを選ぶ今回の制作においてもこれと同じくあまり選ばれなかったものと考えられる。

建造物類が1, 2回を通じて最も多くなった一つの要因は、建造物には「ピアノ」や「家」など、他の種類のミニチュアに比べて大きいものが多く、砂箱の広さとの関係で一つだけでも置きやすく感じられたということであろう。また、建造物は人間が手を加えて作ったものであり、建造物をつつ置くことでそこに人間の存在を暗示することができるというのも、多く選ばれた要因となったと考えられる。

例えば、M6は2回目で「いす」を置いたが、「誰が座るのかなあ、とかいろいろ考えることができる」ことを、その「いす」を選んだ要因にあげている。他にも、「誰かと一緒に座れそうなベンチ」(F5#2)であったり、「自分が中にいることをイメージして」選んだ「城」(M7#2)であったり、「真っ白い砂地で女性がピアノを弾いているところを思い浮かべて」選んだ「ピアノ」(M1#2)であったり、使ったミニチュアは建造物であっても、表現したかったものはその建造物に関わる人間であったというような例はいくつかあげることができる。これらの被験者にとっては、人間を広い砂箱にぽつんと一人で置いてしまうよりも、比較的大きな建造物をつつ置いてそこに人間の存在を想像する余地を残した方が、より多くのことを表現できるように感じたのではないだろうか。

もう一つ注目したいのは、植物を用いた者が少なかったこと(1回目3人, 2回目0人, 全体の7.5%)である。岡田(1984), 木村(1985)ともに、一般的な箱庭制作では、植物類の使用は年齢とともに増加する傾向にあって、大学生では全使用玩具数の40%前後(岡田: 38.9%, 木村: 40.5%)にまでのぼるという結果を示している。ミニチュアをつつ選ぶ今回の制作では、これと異なる傾向がはっきり表れたことになる。木村(1984)は「箱庭の世界を飾りたいとき、そして作品と自分との間にある程度心理的距離をおいて表現するとき、植物の使用量が多くなるのではないだろうか」と述べている。植物によって「世界を飾る」ためには、飾られるべきものが別に存在しなければならない。つまり、植物以外のものを使って何かを表現してこそ、植物が世界を飾るのである。今回のようなミニチュア一つのための制作で植物を選ぶと、どうしてもその植物自体が主役となってしまうであろうし、「世界を飾る」ために植物を用いるのは難しかったと思われる。「世界を飾る」目的以外に植物を用いるような使い方、すなわち植物自体を主役として用いるような使い方は、意外と難しいということかもしれない。このように考えると、大学生の箱庭制作に植物が多く使われるとは言え、植物自体が主役となっているような使われ方は案外少ないのではないかと予想することができる。今後検討してみる価値があるかもしれない。

3. ミニチュアの置かれた領域に関する結果と考察

ミニチュアの置かれた場所を、岡田(1972)に倣い9つの領域に分けて集計したものを図1にまとめた。

1回目と2回目で個数が大きく異なるような領域はなく、ミニチュアの置かれる領域は回数の影響をあまり受けないようである。また、ミニチュア選びの場合、全ての被験者が1回目と2回目で異なったものを選んだのに対して、領域は6人(M2, M7, M9, F3, F6, F10)の被験者で1, 2回とも同じところが選ばれた。

箱を横に用いた場合では、中央, 右奥, 右手前, 左手前の順で選択されることが多かった。これらは、中央と箱の四隅を含む領域であり、一つのミニチュアを置く場合に、中央と四隅が選択

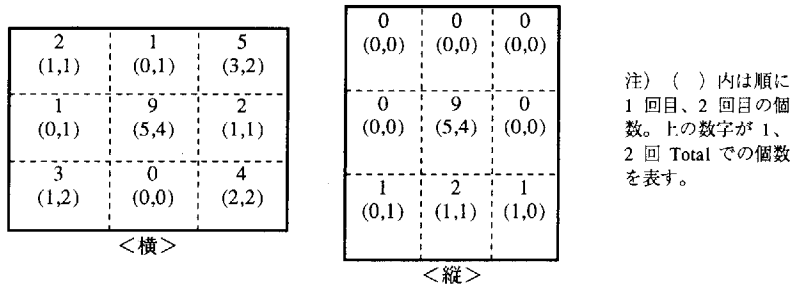


図1 ミニチュアの置かれた領域

されやすい傾向があることを示していると考えられる。このことはまた、被験者にとって砂箱が、9つの領域に分割されたものとしてよりも、中央と四隅を結ぶ対角線を基準とするような空間として体験されやすいことを示しているかもしれない、今後こうした対角線を基準としてミニチュアの置かれた場所を整理する必要があるのかもしれない。

砂箱を横に用いた場合でも、縦に用いた場合でも、最も多く使用されたのは中央領域であった。中央を選んだ被験者のうち、「どこに置か重要ではなかった」ために中央に置いた者が2人(M3#2, F6#2),「箱の中心は嫌だった」と中心は外したものの、領域で分類すれば中央領域に入る者が3人(M8#1, F1#1, F10#2)いた。

積極的に中央を選んだ被験者があげた理由は多岐にのぼるが、「ひきたつから」、「1番目立つから」、「主役だから」、「ミニチュアの360°全てが見られるから」など、選んだミニチュアそのものを中心的存在として強調したいという思いが感じられるものが多かった。

中央以外を選択した被験者の中にも、「真ん中に置くのはさびしい」(M1#2, M2#1, M6#1)や、「真ん中に置くのは嫌」(F7#1)など、中央領域を意識した上で中央以外に決めた者がいた。このことは、結果として中央に置くにせよ、置かないにせよ、ミニチュアを置こうとするときに中央領域が意識されやすいことを示していると考えられる。一つのミニチュアを置く場合、「中央(中心)に置くか、中央(中心)を外すか」ということが、置く場所を決める一つの基準となっているとも考えられそうである。

中央領域に関しては、岡田(1972)が、「自己空間」と呼んだり、河合・藤井(1976)が、中央領域に玩具が集中する傾向を指摘して、「この領域は半ば普遍的に文字通り箱庭の『中心』といえよう」と述べているなど、他の領域とは異なる特別な領域であることが仄めかされてきたが、今回の結果も、それが砂箱の中央であるがゆえに、何か特別な領域として体験されやすいことを思わせるものであったと言えるだろう。

4. 砂への関与についての結果と考察

砂に触る、砂を掘る、盛り上げる、動かすなど、砂への関与が見られた者は、1回目で18人(90.0%), 2回目で15人(75.0%)であった(表1参照)。このうちM4の1回目は、ミニチュアを置く前に指先で砂の感触を確かめるように触れただけで、砂で何かを表現しようと試みたわけで

はなかった。それ以外の被験者、つまり1回目の17人と2回目の15人は、砂を造形して何かを表現する意図を持って砂に関与した。

大学生の制作者が砂に触れる割合については、岡田(1984)が61.3%、木村(1985)が69.6%という結果を報告している。これと比較すると、ミニチュアを一つ置くという今回の調査では、砂を用いた被験者の割合は高くなっていると言えるだろう。これは、一つには、教示において砂を自由に用いてよい旨を明言したことが影響したためであると考えられる。

もう一つ考えられるのは、ミニチュアを一つしか使用できないために、ミニチュアのみで何かを表現することが難しく、その分を砂の造形によって補おうとした者が多かったということである。このことは、例えば、「カンガルーが見ている方向も平らではさびしい感じがしたので小さな山を作ってみました(F7#1)」という振り返りや、「全体の空間を利用できるようなものがよかったから、橋を使って、川を作ろうと思った。(中略)橋を1つ置くことで砂の上にもう1つ“川”を作ることができるから(F3#2)」という振り返りから読み取ることができると思われる。

また、木村(1984)は、箱庭表現とロールシャッハ反応の関連を検討するなかで、「箱庭における砂の使用は、状況をどう多面的に取り扱い、アプローチするか、という側面よりも、どちらかといえば、内面的な精神活動の活発さや生産性、イメージ量と関係するものである」という見解を示している。このような観点から砂への関与を理解するならば、一つのミニチュアを選び、置く今回の制作では、内面の精神活動が活発となって、生産性が高まり、イメージ量が増えたと見ることができるのかもしれない。これは、被験者の人格特性によるものかもしれないが、一つしかミニチュアが使えなかったために、被験者が内的なイメージによって補わなければならない部分が増えたために、より内面の精神活動が活発となったと考えられなくもないであろう。

まとめと今後の課題

以上、「一つのミニチュアを選び、置く」という箱庭制作について数量的に表すことのできる結果に関して整理し、その特徴について考察してきた。

主要な点についてまとめると、ミニチュアが一つのみであるために制作所要時間は、一般的な箱庭制作に比べ、大幅に短かった。しかし、砂を丁寧に造形することで20分以上の時間をかけて制作したものもあり、ミニチュアが一つであっても十分に箱庭制作と呼べるようなものになりうることを示された。初発時間は、一般的な箱庭制作よりも長く、一つのミニチュアを選ぶまでにかかる時間が、一般的な箱庭制作よりも長くなるのだと推測された。

使われたミニチュアに関しては、全ての被験者が1回目と2回目で異なるミニチュアを選ぶという結果となった。これは、「何が置かれたか」ということから箱庭作品やその制作者について議論することに慎重になるべきことを示していると考えられた。またこのことは、同じ「ピアノ」のミニチュアが7人もの被験者によって使われたことから指摘でき、ミニチュアが「いかに置かれたか」という視点が、箱庭制作の理解にとって重要であることを示す結果であると考えられた。この点に関しては、今後ビデオ記録や質問紙への回答、およびインタビューの記録を詳細に検討することで明らかにしていく必要があるだろう。

また、ピアノを選んだ被験者がピアノにまつわる個人的体験について多く語ったという事実を

もとに、どのミニチュアが選ばれるかということに関しては、今・ここでの体験だけでなく、被験者の過去を含めた個人的体験が大きな影響を与えているのではないかと推測した。この点に関して検討することも、今後の大きな課題であると考えられよう。

ミニチュアの種類については、植物類が少なくなるという特徴的な結果が得られた。ミニチュアが置かれた領域は、中央領域が最も多く、続いて砂箱の四隅を含む領域が多くなるという結果であった。このことから、砂箱を9分割して領域を検討するだけでなく、中央と四隅を結ぶ対角線を基準とした空間として捉え、使用領域について検討する必要があることが示唆された。

砂へ関与した被験者は、一般的な箱庭制作よりも多くの割合で見られた。このことは、ミニチュアが一つに限定されることによって、箱庭療法を構成する基本的要素である砂がよりクローズアップされて体験されることを示唆しており、砂を触る体験についてビデオ記録やインタビュー記録を検討することで、砂が箱庭制作に与えている影響について考察する手がかりが得られるかもしれない。

以上、今回整理した結果は、あくまで今後应用的に考察していくための基礎であると考えている。もともとこうした方法をとることによって検討することをねらった「制作者の体験の過程」に関する考察をはじめとして、今回いくつか得られた今後検討すべき課題の一つひとつ取り組んでいくことで、「制作過程において何が起きているのか」という大きな問題について少しずつ明らかにしていければと考えている。

文 献

- 藤原勝紀：三角形イメージ体験法に関する臨床心理学的研究 ―その創案と展開―，九州大学出版会，1994。
- 藤原勝紀：三角形イメージ体験法 イメージを大切にする心理臨床，誠信書房，2001。
- 平松清志：箱庭療法のプロセス 学校教育臨床と基礎的研究，金剛出版，2001。
- 河合隼雄・藤井しのぶ：箱庭の空間象徴的理解，日本心理学会第40回大会発表論文集，1027 - 1028，1976。
- 木村晴子：箱庭療法―基礎的研究と実践―，創元社，1985。
- 三木アヤ・光元和憲・田中千穂子：体験箱庭療法―箱庭療法の基礎と実際―，山王出版，1991。
- 光元和憲・田中千穂子・三木アヤ：体験箱庭療法―その継承と深化―，山王出版，2001。
- 水島恵一：実証的かつ実感的な体験研究の方法とテーマ ―「体験と意識」に関する個別・総合プロジェクトに向けて―，文教大学紀要，12：1-11，1978。
- 水島恵一：簡素化された3つの投影法による自己深化の過程と方法 ―今後の臨床研究の手引きを兼ねて―，体験と意識に関する総合研究，1：21-28，1979。
- 水島恵一：第6章 図式的投影法 ―図式的に表現されたイメージ―，イメージの人格心理学（水島恵一・上杉喬編）：152-207，誠信書房，1986。
- 岡田康伸：サンドプレイ技法の研究 ―領域に関する一研究―，京都大学教育学部紀要，18：231 - 244，1972。
- 岡田康伸：箱庭療法の基礎，誠信書房，1984。
- リース滝幸子：象徴に寄せて，現代のエスプリ別冊箱庭療法シリーズⅠ 箱庭療法の現代的意義，226 - 240，2002。

（博士後期課程2回生，心理臨床学講座）